

# 人口減少・高齢化の進む山間地域におけるツーリズムのあり方を考える

## —奈良県吉野郡十津川村の事例を中心として—

河本大地（奈良教育大学）

Keyword： 課題先進地域、ツーリズム、宿泊施設

### 【目的と背景】

本研究の目的は、人口減少と高齢化の進行する山間地域におけるツーリズム（観光）のあり方を考えることである。奈良県吉野郡十津川村を主な研究対象地域とする。

日本の国土の大半は中山間地域である。特に山間地域では、人口の減少や高齢社会化、耕作放棄地の増加、森林管理の困難化、野生動物被害の深刻化、学校統廃合、医療・福祉をめぐる状況の困難化、産業構造の脆弱化、都市部へのサービス供給の依存度増大、補助金依存の活動の多さなど、中山間地域にほぼ共通する課題の多くがより深刻な形で現れている。また、抱えている課題の中には都市部を含む全国に共通するものもあるが、これらに先進的に対処してきた地域でもある。

このような山間地域において、ツーリズムはこれまで「地域活性化の切り札」のように扱われることが多かった。近年の、交流人口や関係人口といった言葉を用いた取組においても重視されている。とはいえ、人口減少・高齢化等が進む中で、観光・交流施設の維持・管理、人員確保などが難しくなっている事例がみられる。山間地域の人々の暮らしにリスペクトの意識をもたない来訪者もあり、消費者行動に関する諸問題も、あまり社会の表には出ないものの存在する。さらには、2020年には新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大による影響を強く受けている分野でもある。

本研究の対象地域とする十津川村は、奈良県の最南端にあり、和歌山県の田辺市・新宮市・北山村や三重県の熊野市と隣接している。紀伊半島のほぼ中央に位置する。村としては、北方領土を除き日本最大の面積（672.38 km<sup>2</sup>）を有する。森林が面積の約96%を占め、これを活用した林業が盛んにおこなわれてきた。7区55大字からなる多様な地域社会を有している。

また、温泉等の地域資源に恵まれており、観光産業の発展が未来を築くひとつの道となりうる。村では1960年代から、国道168号の開通などを機に観光地化を目指してきた。1985年に十津川温泉、湯泉地温泉、上湯温泉が「十津川温泉郷」として国民保養温泉地の指定を受け、村では2004年に「源泉かけ流し宣言」を発表した。和歌山県・三重県

と境を接する瀨峡は、観光地として長い歴史をもつ。日本で最も長い鉄線の吊り橋である「谷瀬の吊り橋」等の生活文化遺産も有する。世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の登録資産である大峯奥駈道や熊野参詣道小辺路も通っている。これらは多くの観光者をひきつけている。キャンプ、釣り、山歩き等を目的とする来訪者もある。

しかし同村は、過疎化・高齢化が顕著である。また、自然災害に見舞われることも多い。1889年に発生した十津川大水害では、豪雨によって土砂崩れ、家屋の全壊、田畑の浸水・埋没・消失などが起こり、168名が死亡した。その後、約2,600人が新たな生活地を求めて北海道に移住し、現在の新十津川町の礎が築かれた。2011年には台風12号による紀伊半島大水害が発生し、村は全壊18棟、半壊30棟、床下浸水14棟、死者6名、行方不明者6名、重傷者3名という甚大な被害に見舞われた（十津川村、2014）。

このような十津川村は、日本全体が「観光立国」を掲げる一方で人口の減少や高齢化が急速に進行し、かつ大きな自然災害が頻発している状況にあって、学ぶべき課題先進地域としてとらえることができる。

### 【方法】

聞き取りと文献調査が主である。2017年から2020年にかけて村を繰り返し訪ね、十津川温泉・湯泉地温泉・上湯温泉・瀨峡（瀨八丁）などの観光地や、熊野参詣道小辺路が通る神納川区などの宿泊施設等の経営者や、周辺の住民等に聞き取りを行った。また、温泉地・観光地としての変化について、村役場から毎月出されている「村報十津川」や、観光協会・宿泊施設が作成した資料、既往研究をはじめとする諸々の文献を渉猟した。

### 【結果1 村のツーリズムの概況】

十津川村におけるツーリズムは長い歴史をもつ。特に湯泉地温泉には、16世紀には著名人が多く訪ねていたことがわかっている。深い山峡のいで湯や溪谷を愛でる来訪者が従来から見られた。

とはいえ、村のツーリズムは、本格的には1960年代のダム建設をはじめとする電源開発にともなう自動車道の

整備や、北山川のプロペラ船・ジェット船をはじめとする航路開発など、交通網の発達を契機に展開してきた。観光施設の充実した1990年前後には、バブル経済の影響も受け、多くの宿泊者があった(図1)。特に宿泊者数は十津川温泉と湯泉地温泉で多かったことがわかる。

しかし、その後は村を挙げての十津川温泉郷のPRや温泉を中心とした施設整備にもかかわらず、宿泊者は当時の半数以下にまで減少している。宿泊施設の数と収容人員数も大きく減少した。十津川村観光協会(1994)と現地調査により1994年と2020年を比較すると、ホテル・旅館は、19軒から12軒に減少したことがわかる。温泉施設の存在が重要な存続要件になっている。民宿は30軒から15軒に半減した。特に瀨峡では村内の宿泊施設は皆無になった。

2011年に発生した紀伊半島大水害も、村のツーリズムに対する打撃となった。図1にみられる2015年の宿泊者数の小さな山には、土木建設業を中心とする復興需要や、村を挙げた復興PRの影響があると思われる。しかし、近年はまた減少に転じている。

2015年の月別の宿泊者数をみると、春のゴールデンウィーク、夏休み、紅葉の時期、春休みに多いものの、6月や9月、冬季には少ない(図2)。月別の入込客数をみると、宿泊者数と似た季節変動があるものの5月と8月のピークが目立つ(図3)。また、このデータには宿泊者数が含まれるが、宿泊者よりも日帰り客のほうがはるかに多いことがわかる。

一方、その間に日本人の観光行動は、団体ツアーから個人や小グループの旅行に比重が移っている。また、インバウンドツーリズム(訪日外国人の観光)の動向も無視できない。2004年に「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界文化遺産として登録され、その構成資産のひとつである熊野参詣道(熊野古道)小辺路(こへち)の歩行者が、特に外国人に関して増えている。同じく世界遺産の大峯奥駈道(おおみねおくがけみち)は、修行のための険しい道ではあるが、沿道の玉置神社については「神様に呼ばれた人しか辿りつけない」等として神秘性が話題になったこともあり来訪者が多い。小辺路沿道の神納川区の事例(河本・劉・馬、2018)や、小辺路および玉置神社に近い十津川温泉の事例(河本・劉・馬、2019)では、インバウンドが重要な位置を占めていた。

こうした中、従来なかった高価格帯の旅館や、複数の農家民宿など、新たな宿泊施設も少数ながら生まれている。また、個々の事業者は工夫を凝らした経営を続けて

きた。しかし、観光地としてのエリアマネジメントの視点は弱い状況にある。

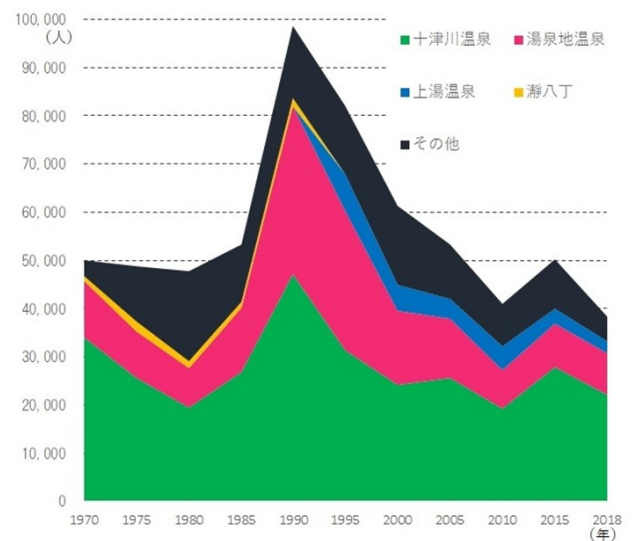


図1 宿泊者数の変化  
十津川村観光協会調査資料による。

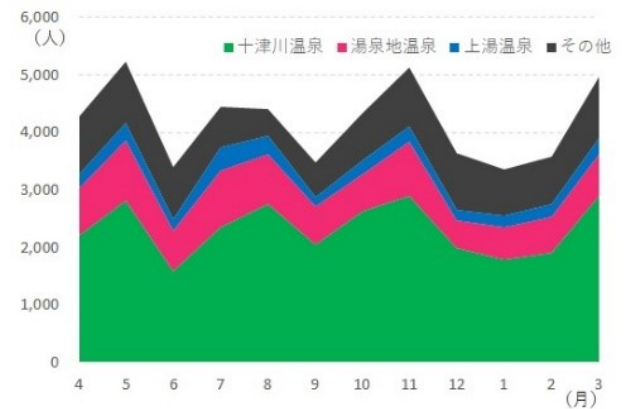


図2 月別にみた2015年度の宿泊者数  
十津川村観光協会調査資料による。

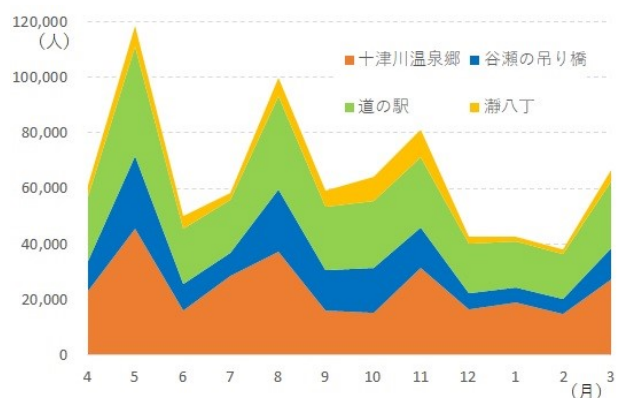


図3 月別にみた2015年度の入込客数  
十津川村観光協会調査資料による。

## 【結果2 湯泉地温泉の事例】

湯泉地温泉は、十津川村で最も古い温泉地であり、源泉周辺から十津川に沿って旅館・民宿が点在している。2019年時点で、公衆浴場2つのほか、旅館5軒、民宿2軒があった。2020年4月時点では旅館（ホテル）1軒が廃業となり、また旅館1軒が休業中である。また、道の駅「十津川郷」もある。

静かで山峡の情緒を味わえる環境に対しては、“癒される”との評価が高い。旅館や民宿は家族経営がほとんどであり、当地の季節食材を使用した料理を味わうことで宿泊客は宿に親近感を得ることができる。また、周辺には良質な自然環境や歴史文化的資源も多い。

しかし、利用客の減少は現在の課題になっている。一乃湯の閉館や旅館経営者の高齢化、従業員不足など、近年の湯泉地温泉は多くの経営上の問題を抱えている。それぞれの宿が離れているため、温泉地としての活気にも乏しい。

新興の温泉地である十津川温泉と比較した際の、温泉地としての位置づけも憂慮される。観光客の中には、十津川村の温泉は十津川温泉、十津川温泉郷イコール十津川温泉ととらえる人もいる。多くの観光客が湯泉地温泉よりも十津川温泉に宿泊する傾向が生じている。その要因として、玉置神社、瀨峡、果無集落、野猿など十津川村南部の観光地や、和歌山県田辺市・新宮市・那智勝浦町などの観光地から距離があることは考えられる。また、公共交通機関にも課題が見られる。奈良交通運営の観光バスは十津川温泉を中心に運行しているため、湯泉地温泉を訪れる観光客にとっては不便である。バス停は現在、十津川村役場の横にしかなく、多くの宿泊施設までは公共交通機関利用の場合は徒歩を余儀なくされる。しかも、そのバス停に湯泉地温泉のどこに何があるかを示す看板は設置されていない。足湯の設けられている道の駅「十津川郷」や、2つの公衆浴場にも、そうした看板はない。村が湯泉地温泉を観光資源として活用しきれていないとは、到底言えない状況である。

湯泉地温泉の宿泊施設等の経営者は、この状況に危機感を抱いており、観光客に湯泉地温泉の良さをアピールしたいと考えている。自然豊かな地域にある歴史ある温泉地であること、そして泉質の良さは、観光客に十分アピールできると考えている。また、十津川のほとりで鳥のさえずりを聞きながら温泉を楽しむこと、浴衣を着て泉湯と滝の湯を巡ることができるのは湯泉地温泉ならではのことであり、観光客がリラックスできる空間を提

供できると思われる。それぞれの宿が離れていることは、徒歩でのハシゴには不便である一方で、車両の騒音は少なく、人混みも少ないことから、純粋に温泉を楽しみたい観光客にとっては、むしろ温泉の醍醐味を十分味わえる環境であると言える。湯泉地温泉は遠くから足を運んでも訪れる価値がある温泉地である。

## 【結果3 瀨峡の事例】

瀨峡は、飛び地を2つもつ和歌山県（北山村・新宮市）と、三重県（熊野市）と、奈良県（十津川村）の3県にまたがる。熊野川の支流である北山川の渓谷で、上流から順に「奥瀨」「上瀨」「下瀨」と呼ばれる。下瀨の上流側の約1kmは奇石・巨石が並び、古くから観光スポット「瀨八丁」としても親しまれている。その観光拠点である田戸集落は、十津川村にある。現在、瀨峡はジェット船や川舟を利用したり、周辺から眺望したりして景色を楽しむ観光地となっているが、以前は人や荷物の輸送路としての役割も担っていた。ここにある瀨ホテルは、筏師のための旅館として、1917年（大正6年）に「あづまや」として開業した。「あづまや」は「招仙閣」と名を変え、昭和初期に現在の名称になったという。

田戸集落は、現在もジェット船や川舟の停泊や、喫茶店があるなどにぎわっているように見える。また、駐在所や郵便局もあるが、約25戸ある家屋のうち、常住は4戸であり、住民は高齢者ばかりである。

2011年の紀伊半島大水害では、瀨ホテルの下層階など各所が被災し修理を余儀なくされた。瀨ホテルはその後、4代目の経営者が新宮市から通勤し、喫茶店として営業している。瀨峡を訪れる観光客は、関西圏、続いて東海圏、関東圏が多い。道路が整備され、瀨ホテルをはじめとする田戸を訪れる観光客自体は増加したが、宿泊施設のない状況が続いている。

## 【結果4 神納川区のグリーンツーリズムの事例】

神納川区は、十津川村を構成する7区のひとつで、5つの大字からなる。同村の北西部に位置する。小中学生が皆無であり、33世帯67人（2017年4月1日現在）の大半が高齢者である。地域社会の維持が困難化している。

ここでは、2004年以降、世界遺産である熊野古道・小辺路を歩く観光客が現れるようになり、特に外国人の来訪者が増えた。しかし、宿泊施設がない状況であった。

一方、これとは別に、グリーンツーリズムの推進施策のひとつであった「子ども農山漁村交流プロジェクト」

が2008年に導入され、小学生の農山村体験の受け入れが行われた。しかし、10戸以上あった民泊受け入れ家庭の高齢化や、推進施策の事業仕分け、2011年の紀伊半島大水害などの影響で、現在は農家民宿2軒のみが維持されている。維持の要因は、経営する家族の構成員が複数おり比較的健全であること、他にも収入源があること、観光者との交流に喜びを感じられることである。また、そこには和歌山県の田辺市熊野ツーリズムビューローの動きが大きく影響している。田辺市は、世界遺産登録を契機とし、観光地化を大きく進め、インバウンドツーリズムを取り入れながら急速な発展を促進した。観光客と観光消費額の増加からみると、世界遺産の集客効果と経済効果ははっきりと見られる。神納川区住民は、域外からのツーリズムの動きに対応せざるを得ない状況にある。

とはいえ、これをもって神納川区の主体的なグリーンツーリズムの動きが失敗であったとは決して言えない。村報の2011年12月号に「地域の声」として、「避難所で過ごした方が『神納川 HBP で旧五百瀬小学校の施設を使っていたから、そこに避難したときどこに何があるか、また、誰がどの作業を得意とするか、避難したときも全員まとまっていた』と話されたことに日ごろのコミュニティの強さを感じました」とあるように、子ども農山漁村交流プロジェクトを中心としたグリーンツーリズムの経験は地域コミュニティの強化につながっている。また、今後も、世界遺産である熊野古道小辺路を歩く観光者の来訪は続くと考えられる。これらに対応できる宿泊施設の存在や、地域の可視化、観光者に対する住民の理解、地元食材の活用、内外における地域ファンの存在等に、グリーンツーリズム推進の成果が確認できる。グリーンツーリズムの経験は、次なる展開への基盤となっている。

### 【今後のあり方】

十津川村におけるツーリズムの今後は、交通アクセスがさらによくなることで、いっそう宿泊者数が減少する懸念がある。日帰り客ばかりでは、村外の人に村の奥深い魅力に触れてもらえないし、お金が村に落ちず観光関連産業が成り立ちにくい。経営者の高齢化に伴うさらなる宿泊施設減少も危惧される。こうした課題は構造的であり、個々の事業者の努力のみで状況を好転させるのは難しい。

そこで3つの提案をしたい。第一に、村は各観光地の将来を成り行き任せにせず、村内外の若者を交えた形でエリアマネジメントを組織的に検討したほうがよい。地

域としてどうありたいかというビジョンを明確化し、具体的に時間的・空間的な計画に落とし込む必要がある。特に湯泉地温泉では、温泉地としての情緒や回遊性をどうつくるかが課題である。

第二に、十津川村民が村を積極的にとらえ、村外の人に案内・紹介できるよう、村内他地域を知る機会をつくったほうがよい。学校での地域学習を充実させるとともに、大人も十津川村民全員が上湯温泉や瀨峡などの観光を経験しているという状態にしたい。

第三は、人や地域のネットワークとその可視化である。本研究で取り上げた観光地や宿泊施設は、ここを選んで経営あるいは観光する個性的な人々の存在で成り立っている。十津川村のツーリズムをめぐる人的つながりや、観光客の周遊形態を可視化すると、様々な可能性が開けてくると思われる。この点はツーリズム研究・観光地域研究における今後の課題でもある。

### 付記

本研究は、十津川村史編纂事業の一環として、十津川村教育委員会のご協力を得て実施しました。現地調査にてお世話になりましたみなさまに、特に長時間の聞き取りにご協力いただきました各宿泊施設や地域のみなさまに、厚くお礼申し上げます。また、学芸員の藤重季恵さまをはじめとする十津川村教育委員会のみなさまにも、調査の便宜を多々図っていただきました。感謝申し上げます。現地調査および意見交換は、焦 自然（奈良教育大学学部研究生）・胡 安征（奈良教育大学大学院生）・保坂 真（奈良教育大学学部生）・嶋田知加子（奈良教育大学学部生）等とともにおこないました。

### 【引用文献】

河本大地・劉 丹・馬 鵬飛（2018）：山間地域におけるグリーンツーリズムと世界遺産観光の持続可能性—熊野古道（小辺路）の通る奈良県十津川村神納川区の事例から—。奈良教育大学紀要，67，91-103。

河本大地・劉 丹・馬 鵬飛（2019）：十津川温泉誌—温泉地としての歴史と現状—。奈良教育大学紀要，68-1，pp. 125-145。

十津川村（2014）：『紀伊半島大水害—平成23年台風第12号による災害—十津川村の被害と復興への記録—』十津川村。

十津川村観光協会（1994）：『1994年度版—十津川村観光情報—』十津川村観光協会。